

## 要旨

杜 曉磊

言語学では、1980年代から統語論・意味論の立場から WH 移動や WH 疑問詞、文末終助詞などについての研究が盛んに行われた。本研究はこのような研究背景を踏まえて、中日両言語における疑問文と文末終助詞の対照研究を行った。疑問文は、主に中日両言語の「なぜ」／“为什么”を含む多重 WH 疑問文を中心に考察した（第2章）。文末終助詞は、重要な文末終助詞の「か」とそれに対応している“吗”を検討した（第3章と第4章）。具体的には以下の通りである。

「なぜ」／“为什么”を含む多重 WH 疑問文については、本論文は日本語・中国語における構文の差を考察対象にしたが、それは会話環境によって意味が変化しないので、語用論との関係は弱い。したがって、語用論の立場から研究する必要がないので、統語論・意味論の立場のみから考察を行った。

日本語多重 WH 疑問文では、目的語は必ず付加部の左側にある。たとえば、WH 句が二つある（目的語「何」と付加部「なぜ」）場合、目的語「何」は付加部「なぜ」の左に生起しなければならない。つまり、「なぜ」を含む日本語多重 WH 疑問文において、疑問詞の先行関係は固定している。即ち、項の疑問詞（「誰が」「何を」）が「なぜ」よりも一つでも先行しなくてはならない。中国語の“为什么（なぜ）”を含む文では、単文においては、“为什么（なぜ）”と他の通常の WH 句は共起できず、競合関係があり、複文になると、競合関係が消える。しかし、この時、“为什么（なぜ）”は狭い範囲でのみ解釈され、他の名詞的な WH 疑問詞は広い範囲でのみ解釈される。このような相違点について、統語論・意味論の立場から考察を行った。結論は以下の通りである。

統語論的には、日本語「なぜ」は他の名詞的な疑問詞と単文において、競合関係がなく、共起できるのは、日本語の名詞的な WH 疑問詞の OP は DP/PP に基底生成し、範囲範囲内の疑問詞を無差別束縛して、文頭に移動し、文頭に基底生成する「なぜ」の sentential operator に付加するので、競合関係が起こらないからである。中国語“为什么（なぜ）”は単文において他の名詞的な WH 疑問詞と競合関係があり、共起できないが、複文において競合関係が消えるのは、中国

語“为什么”は *sentential operator* として文頭に基底生成し、名詞的な WH 疑問詞の OP も基底生成するので、競合関係が起り、複文の場合、[Spec CP] が二つあるので、それぞれ基底生成して、共起できるからである。意味論的には、両言語において、「なぜ／为什么」は両方とも指示関数の基準になれず、関数による結果だけを表すことができる。すなわち、多重 WH 疑問文において、「なぜ／为什么」は狭いスコープを取り、他の疑問詞は広いスコープを取る解釈しかない。日本語において、指示関数の基準を表す名詞的な WH 疑問詞は先行し、関数による結果を表す「なぜ」は後に出現する。中国語においては、WH 疑問詞の間に先行関係がないが、単文・複文に反映される。

まとめると、中日両言語における「なぜ」／“为什么”を含む多重 WH 疑問文の相違点について、新しい説明の仕方を提案した。この問題については、Takita and Yang (2014)が Probe-Goal システムを利用して、Valuation Condition を提案した。しかし、多重 WH 疑問文には WH 疑問詞が多数あるので、全部に素性チェックを行うことは複雑すぎる。また、名詞的な WH 疑問詞と副詞的な WH 疑問詞を区別せずに素性チェックするのは不適切である。また、中国語の「为什么（なぜ）」文では、名詞句的な WH 疑問詞と疑問 OP にはそれぞれ素性が一つだけであるので、全部の素性をチェックしなければならないという Valuation Condition の条件が満たされていない。したがって、Valuation Condition はうまく機能しない。それに対して、本論文は第 2 章で、意味上で、「なぜ」／“为什么”は両方とも指示関数の基準になれず、関数による結果だけを表すという同じ本質を持っているが、構造上では、日本語の名詞句的な WH 疑問詞と中国語の名詞的な WH 疑問詞の疑問 OP の基底生成位置が異なるので、「なぜ」／“为什么”を含む多重 WH 疑問文の相違点が現れたからであると新しい説明の仕方を提案した。この新しい説明の仕方は Valuation Condition より簡単であり、複雑な言語現象を明確に説明できる。

文末終助詞の「か」と“吗”の対照研究については、本論文は二つの立場から考察を行った。それぞれ語用論と通時的発展過程の考察を合わせて研究することと、統語論と意味論を合わせて研究することである。

語用論と通時的発展過程の考察を合わせて文末終助詞の「か」と“吗”を研究することは第 3 章で行った。語用論における発話行為理論を利用して、「か」が「断定型」「表出型」「行為指示型」と三つの種類の文に使い、それぞれ言語の

記述機能、表出機能、情報提供の依頼機能を果たしているが、中国語“吗”は「行為指示型」だけに使え、情報提供の依頼機能を果たしていると指摘した。さらに、歴史的発展過程から、そのような相違点が生じる原因を究明した。歴史上、日本語では、係り結びがあったが、係り結びが崩壊するとともに、係り結びの小辞「か」は消失したのではなく、強調された語の後から文末に追いやられた。係り結びは反問、逆接、感嘆などを表すことができるので、文末に追いやられた小辞の「か」も疑問、感嘆などを表せるのは当然のことである。また、中国語の古文では、係り結びの現象がなく、WH 疑問文は WH 疑問詞の前置で、Yes/No 疑問文は文末終助詞で疑問を表す。さらに、“吗”の以前の形“無”は Yes/No 疑問文だけに使っていたので、“吗”は同じように、Yes/No 疑問文だけに使い、「行為指示型」の文だけに属し、情報提供の依頼機能のみを果たすのは不思議ではないと考えられる。

そして、第 4 章で、統語論・意味論の立場から、「か」と“吗”の対照研究を行った。

統語論においては、Hashimoto (2015)が感覚形容詞の人称制限について、会話文における感覚形容詞述語文において、形容詞の後ろにゼロの Mod を設定し、その Mod の判断者は [Spec SA] にあるゼロ代名詞によって話し手に制限されているという分析を行った。その先行研究を踏まえて、感嘆文文末の「か」は表出を表し、「私」だけの感覚しか表出できないという人称制限もあるので、感嘆の「か」は感覚形容詞述語文文末のゼロの Mod と同じ位置にあると考えられる。また、それは Force とする疑問の「か」と、[Spec SA] にあるゼロ代名詞によって話し手・聞き手に制限されると指摘した。

意味論において、文の真理値と関わる要素が「可能世界 world」「時間 time」の他に、「判断者 judge」にも関係があるという Stephenson (2006, 2007)の説を踏まえて、「か」を含む文は情報を話し手から表出する、あるいは、聞き手から要請するので、選言関数である「か」が表すモダリティは情報の提供者と関連性があると考えられ、情報の提供者が聞き手である場合、「か」が疑問を表し、文中の名詞句か WH 疑問詞は聞き手にとって普通の値を取り、情報の提供者が話し手である場合、「か」が感嘆を表し、文中の名詞句か WH 疑問詞は話し手にとって、予想外の値（極値）を取ると指摘した。

まとめると、第3、4章の独自性は以下の通りである。

“吗”については、それが文の中のある名詞句に絞ることを前提として、文全体をフォーカスとして質問することを提案した。また、WH 疑問文は WH 疑問詞の移動によって疑問を表し、Yes/No 疑問文は文末終助詞の出現によって疑問を表すという中国語古文の疑問表現システムを発見した。

名詞句及び疑問文にある「か」は選言関数であるという先行研究を踏まえて、話し手・聞き手の要素を考慮し、疑問文の「か」が聞き手にとって普通の値を取り、感嘆の「か」が話し手にとって予想外の値（極値）を取ると主張し、より包括的に感嘆の「か」も選言であるとまとめた。つまり、「か」が表すモダリティに情報の提供者（聞き手・話し手）パラメーターを加えることを通して、感嘆の「か」も含む日本語すべての「か」が選言であると統一な説明ができ、一定程度、選言の概念を拡張した。